中学校 社会科のしおり

2025年度
前期号

◆ 世界地図歩き
タイを訪ねて　帝国書院・2

◆ 社会科学習　トラの巻㉜―最終号―
社会科における「見方・考え方」を改めて考える－社会科教育の「不易」－　赤坂 寅夫・4

◆ 帝国書院のサポート A to Z　帝国書院・6

◆ やってみよう！社会科でAL
主体的に歴史を探究し、**学ぶ意義を実感できる**授業づくり－どうして前方後円墳は全国に広まったのだろうか－　西村　豊・8

◆ 授業研究　地理
地理的な見方・考え方を働かせる発問とデジタルコンテンツの活用法
－「世界各地の人々の生活と環境」を事例に－　泉宮 一喜・10

◆ 授業研究　歴史
資料を活用し、視覚的に世界と日本のつながりを大観する
－外国から影響を受けた、新たな国づくりを学ぶ－　長井 利光・14

◆ 授業研究　公民
公民的分野の導入の組み立て方
－「学習の前に」を活用して－　大分県 公立中学校 教諭・18

◆ ICT活用の現在　デジタル教科書・教材
生徒が、つなげて、まとめる、新たな学びへ
－新機能「学びコネクト」・「まとめも」のご紹介－　帝国書院 ICT開発推進室・22

◆ 社会科研究最前線
「造山帯」から「変動帯」へ
－用語の変化の背景を追う－　須貝 俊彦・25

◆ 史料にみる歴史
1851年ロンドン万国博覧会　浮網 佳苗・28

◆ キャッチ！日本と世界の動き　・30

表紙写真：タイ　メークローン市場
商品ぎりぎりを通過する電車と写真撮影する観光客

帝国書院

世界地図歩き

—地図帳とともに世界を歩こう—

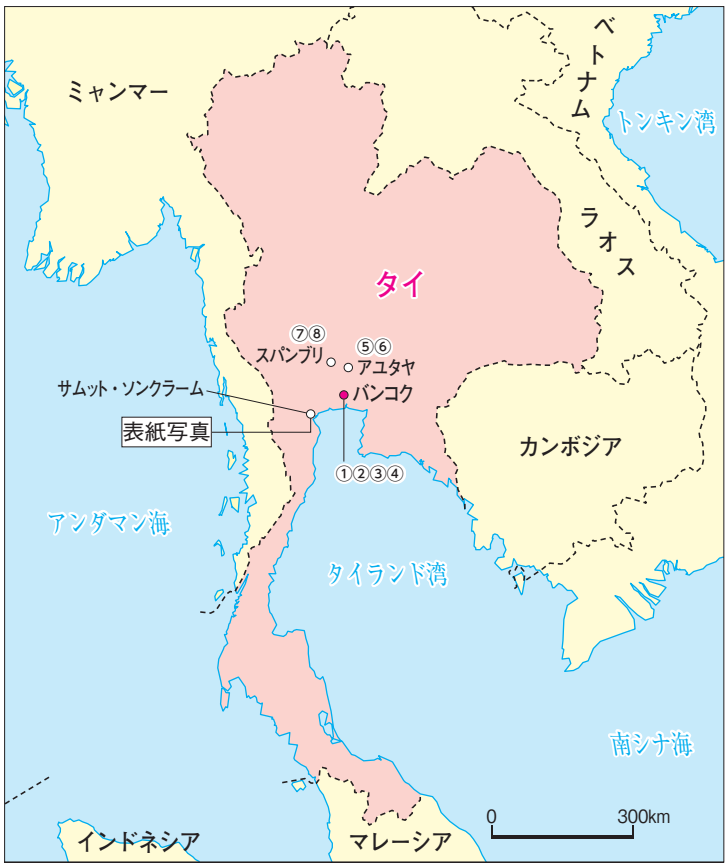
タイを訪ねて

2024年８月、取材班はタイを訪れた。タイと聞いてどんなイメージを持つだろうか。仏教国、王政、タイ米、そして「微笑(ほほえ)みの国」。実際に訪れることで見えてきた、タイ王国の現状を紹介していく。

地図帳参照ページ→p.37・39

動画はこちら

①



■タイ王国

タイには王政が敷かれており、国民は王室をとても敬っている。現在の国王はラーマ10世。国民の中で特に人気があるのは５世（在位1868～1910年）と９世（在位1946～2016年）とのこと。５世は奴隷解放政策（1905年）など近代化のための改革によって、９世は農村開発や貧困削減の取り組みによって、それぞれ国民のために心血を注いだ事実と実績が人気につながっているようだ。バンコク周辺を移動していると、ビルの壁面や街なかのボードなど、各所に国王や皇后ら王家の方々の肖像が飾られているのが見られた（写真②）。

■仏教と王室が身近にある生活・文化

タイでは自身の生まれた曜日を大切にする風習がある。各曜日に色が割り当てられており、例えば月曜日は黄色だ。現国王のラーマ10世が生まれたのが月曜日であるため、月曜日には公務員は全員必ず黄色いシャツを着て出勤することがルールになっている。また、一般市民の中にも、国王に敬意を表して黄色い衣服を着る人も多い。写真①は月曜日の早朝の様子だが、黄色いシャツを着た市民が見受けられる。

タイでは、生活の中でよいことをして「徳を積む」こ

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

とで救われると信じられている。その方法はいろいろあり、その一つに寺院への寄付がある。タイの寺院やその周辺では、20バーツ（日本円で約90円）ほどでお供え物セット（ろうそく、線香、蓮の花、金箔）を販売していることが多い(**写真③**)。これらを寺院の入り口や礼拝所で購入してから参拝するのが通例だ。

また、徳を積むための独特な文化として托鉢がある(**写真①**)。タイでは朝食を外で調達する習慣があるため、早朝の市場は朝食を購入しに来た人で大変混雑している。そこで僧侶用の食料などを購入して寄付し、お返しにお経をあげてもらう。

これらのほかにも、参道やスーパーマーケットなどで売っている僧侶の生活セットを寄贈したり（**写真④**)、寺院で仏像に袈裟(けさ)を寄贈したりもするそうだ（**写真⑤⑥**)。

■タイの農業

バンコクから車で２時間ほど北上してアユタヤ県へ、そこからさらに西へ１時間ほど車を走らせると、スパンブリ県という国内生産第１位の稲作地帯にたどりつく。この地域では、農業センターから苗を購入してそれを栽培し、収穫している。ここスパンブリ県では三期作が主だが、県外では二期作が主となっている。

タイ国内で栽培されているのはほとんどが長粒種のタイ米である。以前はパラパラした硬めの米が人気であったが、ここ30年くらいの変化で、日本米のようにもちもちした軟らかい米を好むようになってきたという。タイ国内でも軟らかい品種が作られ始めており、ある会社では硬い品種500tに対し、軟らかい品種は5000tも売れたそうだ。

田植えの様子を見学していると、田んぼの反対側で腕組みして作業を見つめている男性がいた。しかし、一向に作業に加わる様子はない。田植え、農薬散布、収穫のすべてを専門業者が請け負い（**写真⑦**)、オーナーは監督するだけとのこと。この分業がタイの農業のやり方だという。

見学した田んぼでは、農業センターから購入した苗を田植機に装填(そうてん)し、田植えを行っていた（**写真⑧**)。稲を植える際、タイ中部のほとんどの地域では苗植えが10%、もみまきが90%だが、スパンブリ県に限定すると田植機による苗植えがほとんどになるとのこと。苗の育成、田植え、農薬散布、収穫まで、稲作の分野の機械化がかなり進んでいる様子を見ることができた。

〈写真：帝国書院　2024年８月撮影〉